

桐が谷通信

CHUBU GAKUIN UNIVERSITY
CHUBU GAKUIN COLLEGE

第 4 4 号 2 0 1 1 年 6 月 1 5 日

発行 中部学院大学 宗教委員会
中部学院大学短期大学部

〒501-3993
岐阜県関市桐ヶ丘二丁目1番地 TEL (0575) 24 - 2211

大震災に思うこと

笠井 恵二 (中部学院大学宗教総主事)

天災と人災

3月11日の東日本大震災は、100年に一度という程度のもではなく、1000年に一度といってもいいほどの大災害でありました。想定外のことが起こってしまったのです。よもや自分が生きている間にこのような悲惨な出来事を経験するなどとは夢想だにしませんでした。地震、津波は天災といえますが、それに伴う福島原発の事故とそれに引き続く風聞による被害などは、まったくの人災というべきものでありましょう。

エティの祈り

阪神淡路大震災から16年経って、その何十倍もの惨事を引き起こした今回の災害に接するとき、私たちは一体神はおられるのか、いるとすればどうしてこのようなことが起こるのを許したのかと疑問に思わざるをえないのであります。ドイツの神学者ユルゲン・モルトマンは、「アウシュヴィッツ以後、われわれはどうして神について語ることができようか」と言いましたが、それにひきつづいて「アウシュヴィッツ以後、われわれは神について語る以外に何を語ることができようか」と言いました。

そして1943年にアウシュヴィッツ強制収容所で死んでいった若いユダヤ系オランダ人女性エティ・ヒレスムは「神さま、あなたを助けてあげます」という祈りを日記に書いています。

「私の力がだんだん衰えていくのをとめようとおもいます。しかし、一つのことをしだいにはつきりしてきました。あなたは私たちを助けることができないので、私たちは、あなたをお助けすることによって己を守らねばならないということです。あなたにその責任があるとも思いません。あ

なたは私たちを助けてくださることはできませんが、私たちは最後の瞬間まであなたをお助けし、私たちの心のなかにあるあなたの住み給う場所を守らねばならないのです。あなたはきっと、私の信仰がときどき少し弱まるときなど、私の沈滞期を経験なさるでしょうが、私はつねにあなたのために働き、あなたに忠実であり、私のいる場所からは決してあなたを追い出すようなことはいたしませんので信じていてください。」(大社淑子訳)

これからの生き方

東日本大震災のあと、世界の各地から日本人の態度に賞賛の声が寄せられていますし、多くのボランティアが集まってきて奉仕している尊い姿を毎日テレビで見えています。この不幸な出来事のさなかに、これほど善意に溢れた人々が少なからずいるのだということを知ったとき、不幸の中にも希望がわいてくるのです。

この災害の前と後では、わが国は全く違った方向、違った価値観において進んでいくことになるでしょう。この日の前には人間がこの地上の支配者であり、この世界と自然は人間の繁栄のために利用されるために存在しているのであって、その中で速いこと、便利なこと、豊かになるということを追求めてきたのでありますが、このたび、人間はどうして自然には勝てないのだということをも骨身に沁みて思い知らされたのであります。あの日以降わたしたちは、あたえられた日々のうちにもっと謙虚に、もっと感謝しつつ生きていくのです。それが、尊い命を失った方々の犠牲を無にしないことではないかと思うのです。もう一度、自分の生き方を考えてみて、自分が本当になすべきことは何かを考えてみたいと思います。

被災地に思いを向けて

本学では3月11日の大地震発生直後から、「東日本大震災支援センター」を設置、東北地方出身の学生やご家族の安否の確認から募金活動、そして具体的かつ精神的な支援協力について考えてきました。

そこで本号では、これまでに実際に被災地を訪れた4組の教職員・学生の方々に、被災地の様子とそこでお感じになったことを書いていただき、被災地の方々に思いを向けると共に、今後の私たちの取り組みについて示唆をいただきたいと思えます。

聖書の言葉にささえられ

村上 進 (教育研究センター事務局 職員)

3月22日から4日間、民間NGO「国際飢餓対策機構 (JIFH)」の緊急支援活動ボランティアとして宮城県気仙沼市と岩手県陸前高田市に物資を運んできました。そこには報道から想像していたことをはるかに超える、苦難と哀しみがありました。人づてでなく直接当事者の話を聞き、現場を見て初めて知る事実^{えにし}に打ちのめされます。被災の状況も、必要とされる支援も、数キロメートル刻みで全く異なっていました。

私たちが「がれき」と呼んでいる物に近づいて見れば、それは子どもの靴の片っ方、洗濯籠、グリム童話集。一つ一つがついさっきまでの暮らしの証なのです。そしてその泥の下にはまだ何千人という安否不明の方々。



善意で集まってきたボランティアの間でもストレスは極限に達し、支援の方法やとるべき態度に

ついて、たびたび口論になりました。そのときに私を支えたのは、聖書の言葉でした。同行したボランティアの中に牧師がいて、毎朝「日々の聖句 ローズンゲン」を読んでくれたのです。「ローズンゲン」とは「くじ」のことだそうで、その日にぴったりだと感じられる言葉もあれば、ピンとこない日もありますが、この週のページを開いたとき、そこに記されていたみ言葉はこうでした。

23日 (水) 神はわたしの魂を滅亡から救い出された。わたしは命を得て光を仰ぐ。

24日 (木) 目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。

25日 (金) 主はその民の避け所、イスラエルの人々の砦である。

26日 (土) 主よ、わたしを見捨てないでください。わたしの神よ、遠く離れないでください。

これらの言葉が私たちが正しい立ち位置に引き戻した、その感覚を今も忘れることができません。

災害 VC は思いと縁をつなぐ

大井智香子 (社会福祉学科 准教授)

4/29~5/5 にかけて大槌町を中心に岩手県南部の災害ボランティアセンター(VC)運営に関わる機会を得た。災害ボランティア活動支援プロジェクト会議 (災害支援に関わるネットワーク組織、事務局は中央共同募金に設置) からの要請により、日本ボランティアコーディネーター協会のメンバーとして現地に入った。

訪問した岩手県南部の3市2町では、行政をはじめ生活を支える機関のほとんどが物的人的に深刻な被害を受けており、職員の多くは近親者や同僚、住む場所を失いながら職務に当たられている。災害 VC にはブロック担当制で全国各地の社会福祉協議会 (社協) から職員が派遣されている。大槌町社協には、岐阜県、三重県、長野県、名古屋市の社協職員が入っており、私にとっては懐かし

い先輩や日頃お世話になっている方たちと一緒
することができた。受け入れてくださったみなさ
んに感謝したい。

災害 VC にはボランティアでは対応困難な要求
も寄せられる。相手の都合より自分の気持ちが先
行する場面も相変わらず多い。剥き出しの思いが
衝突しがちな現場であるが、人間の素晴らしさに
感動することもまた数多い。とりわけ心に残って
いるのは、地元の方たちが「ボランティアのみな
さんで召し上がってください」と届けてくださ
ったおにぎりである。これほどの困難に直面しなが
ら見知らぬ誰かを気遣ってくださる姿に、ボラン
ティア活動の本質を見た思いであった。

こうして今回も現地に出向く機会を得たが、大
切なことは「どこで活動するか」ではなく、災害
の事実を忘れないことだ。「今ここでできること
を考える。息の長い活動のためには後方がしっか

りしていないとダメだ。必要ならば現地に行く機
会は必ず来る」 むかし、最前線に出て行きたが
る私を叱ってくれた先輩の言葉は、ずっと私の行
動基準であり続けている。この原稿を書いている
5/21 現在、7 県に 70 を超える市町村災害 VC が
設置されており、現地入りしているメンバーから
毎日各地の報告がメーリングリストに流れる。多
くの方たちとつながりながら、これからも自分に
できることに取り組んでいきたい。

誰もが支援者 ～被災地支援の現状から～

高野晃伸 (社会福祉学科 講師)

壬生尚美 (専攻科 准教授)

後藤真澄 (人間福祉学科 教授)

私達は、5月2日から5泊6日、宮城県から岩
手県の沿岸地域における被災地支援状況並びに要
介護者の状況把握を行った。4日間は主に二次避
難所に生活している被災者への QOL 支援を中心
に、RQ 市民災害救援センターの活動の一環とし
て参加させていただいた。その避難所で生活して
いる被災者の被災地状況は、2カ月近く経つにも
かかわらず瓦礫の山が延々と続き、自然の脅威を
感じる状況にあった。しかし、避難所の人は、共
同生活する中で自主的に役割を決め前向きに生活
しており、皆で協力して必死に乗り越えようとし
ていた。私達は避難所の人と一緒に時を過ごし
「お茶っこ」する中で、当時の様子やここでの暮
らし、健康状態を窺い知ることができた。東北の
人々の我慢強さと人の温かさに触れる日々だった。
この避難所は、ライフラインが通っており、入浴
の送迎サービスや足浴、音楽演奏など細やかなサー
ビスが提供されていた。今でもライフラインが通
らず大変な避難所はいくつもある。RQ の活動は、
住民ニーズ把握と支援、物資の運搬、瓦礫の撤去
など様々な災害支援を行っており、ニーズと支援
のマッチングが重要課題となっていた。しかし、
ゴールデンウィークの6日からボランティアがめっ
きり減り人手不足を痛感した。

また、要介護者は、福祉避難所や要介護者の専
門避難所で生活していた。被災して1か月は乗り
切ったものの、職員が疲労感を訴え、ボランティ



住民の方に向けた
呼びかけチラシ



ボランティア活動
の様子



整理され持ち主の
訪れを待つ写真

アを要請してもなかなか来てもらえない状況にあった。生活はこれからも続く。今後の支援が重要となる。

今回の支援活動を通し、ボランティアの個性を生かし、被災者の個々のニーズに合わせた適切な支援をする必要があり、ニーズに添った支援活動を生み出し、創り上げていく重要性を改めて感じた。そして、身体面のみならず精神面も含めバランス良く支援していくことが重要である。生活のあらゆる場面に人の手が必要であり、誰もが支援者として活動し得る。要介護者の生活支援技術を学ぶ介護福祉は、すべての人の手になり得ることを実感する6日間だった。



朝は7時からその日の活動内容について全体並びに各活動チームの打ち合わせ。

夜は19時から21時過ぎまで各チームの活動報告と、次の日の活動予定、活動希望調査を行っている。



ボランティアが作った足湯。避難所の人たちとボランティアと一緒に浸かって、コミュニケーションの場となっている。

堀田君、山根君の被災地訪問

村上 進 (教育研究センター事務局 職員)

5月27日(金) 仙台市にある東北学院大学の呼びかけにより、青山学院大学、関西学院大学など全国のキリスト教系大学9校が集まり、被災地で必要とされている情報を集約し、単独ではできない大きな支援につなげるためのワークショップが開催された。それに本学から一人で参加することになっていた私は、直後の週末、せっかくの機会なので高野先生たちが連休の間滞在したRQ登米本部まで足を伸ばすことにした。

出発前日の木曜になって「中部学院大学の震災

支援センターの活動について話を聞きたい」と、今年子ども学部を卒業した山根君が訪ねてきた。積極的に被災地を訪問するような支援活動が、本学の中から始まっていないことに疑問をもった彼は、学生の意識調査をするため、かつて所属していた水野友有先生のゼミを訪ねてきたのだった。明日現地と一緒にいくか? と誘ったところ「行きます」と即答。隣にいた堀田君を巻き込んでの被災地訪問が、突然実現することになったのである。以下、二人の文章をお読みいただきたい。

最初のこと

堀田明宏 (子ども学部4年)

とりあえず行ってみなければ現場の状況を感じることは出来ない。そういった気持ちから木曜日に受けた誘いに応じて翌日に東北地方に向かった。被災していない私たちと被災地との間にはボランティアを行う事に対して大きな温度差があり、それは否定できない。

では事実を受け入れるという事から始めたらどうだろう。温度差が生じるのは当たり前のことであり、自分が行って役に立つかどうか気になるのも間違いない。でも私は二日でとてもいろいろなことを見て、それを感じて学びを得た。確かに



雨降りの土曜日。避難所の一角で子どもたちとボール遊びに興じる。
(気仙沼市小泉中学校)



RQ登米本部(旧鱒淵小学校体育館)で宿泊するボランティア。全国から来た、個性的な人々と知り合えた。
(ギターを弾いているのが堀田君)

これは今もボランティアを続けている人たちと比べたら劣るものかもしれない。でも忘れてはいけないのは、ボランティアは勝負じゃないということ。つまりあなたの困っている人を助けたいという気持ちそのものであるということだと思う。

そして被災地に行かない理由は数えればたくさんあるかも知れないが、少なくとも学校側は私たちが気持ちを見せれば資金的な援助をしてくれるはずだ。一日だって二日だっていい。役に立ちたいという気持ちがあれば役に立たなくていい。もう一度だけ自分の家や家族が急になくなってしまったら、ということについて考えてみてほしい。それが今、私とあなたが被災地の為に出来る最初のことだろう。

見ること、サポートすること

山根大典 (子ども学部 卒業生)

私は学生に伝えたい事があります。それは、あなたが少しでも被災者のために何かしたいと思っているならば、一度現地を見るべきだ、ということです。そして、大学は被災地に行こうとしてい

る学生をサポートして欲しいということです。なぜそれを伝えるかということ、現地を見るということは、格段に問題意識が高くなるからです。自分自身も実際に見てそれを実感しました。この問題意識の高まりを多くの学生にも感じて欲しいと思います。

しかし、現地を見るためには様々な事情が壁になると思います。授業、進路、お金、そして自分の心も壁になり得るものです。しかし、きっと現地を見た後はこれらの壁が大したものでもなかったことが分かります。ひょっとしたら、壁だと思っていたものは壁では無いのかもしれない。あなたが「被災者のために何かしたい」と願うなら少なからず被災地の役に立ってます。そしてその活動が後に、自分に大きな糧となります。

大学は、それらの壁を低くできる大きな力があります。特に、金銭面のサポートがあると良いのではないかと思います。私も壁を小さくするお手伝いをします。

これを読んで、「行きたいけれど...」と思う学生が「行く」と決心できることを願います。

岐阜済美学院年題聖句 (2011年度～2012年度)

「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」

新約聖書 (新共同訳) : マタイによる福音書 5章3節

ここにあげられている「心の貧しい人々」とは、どのようなひとのことでしょうか。ギリシア語で「貧しい」を意味する言葉は2つあります。「ペネーシス」は、生活のために働かなければならない人、自分で働いて自分の必要を満たす人のことですが、もうひとつの「プトーコス」は極度の惨めな貧困で、「うづくまる」、「ちぢこまる」という意味をもつプトーサインという動詞を語幹にしています。それは人々を災難で萎縮させてしまう貧困です。それは、無一物の人、立ち上がれないまでに完全にたたきめされた人のことです。そのような人こそが幸いであり、祝福されているのだと主イエスは言われます。なぜならそのような人はこの世から完全に見放されて、全ての希望を神のみにつかざるをえない人だからです。ただひたすら神により頼む無力な人に対して旧約聖書詩編第9編にも「苦しむ者の望みは、とこしえに滅びることはない」とあります。逆説的ではありますが、「自分が全く無力であることを知って、ただひたすらに神により頼む人こそが幸いなのである」ということなのです。

【予告】宗教講演会



日時：6月27日（月） 第2限（11:00～12:30）
場所：中部学院 関キャンパス 11301教室
演題：「中国のキリスト教会—苦難から希望へ—」
講師：日本クリスチャン・アカデミー
関東活動センター所長 しゅえん 薛 えん 恩 峰 氏

講演要旨：60年を超える無神論政権の下で、中国人キリスト者はどのような歩みを続けてきたのか。そのありようは、日本ではあまり知られていないのが現状である。

2010年の発表によると、プロテスタント信徒の数は2300万人。単純に比較しても、建国当初の33倍となる。過去30年間、聖書印刷部数は5000万冊で、世界一多い国とされている。文化大革命中、「宗教は人民のアヘン」と認識され、弾圧を受けた。中国共産党の宗教理論では、宗教はいずれ人類社会から消滅していくことになっている。だが、「消滅していくとされた宗教が、なぜ発展し続けているのか」「聖書は本屋で購入できるのか」「キリスト教史三自愛国運動とは何か」等、さまざまな問いも起こる。

わたしは、これらの素朴な質問に答えるだけでなく、波乱に富んだ歴史を歩んできた中国教会の現状をご紹介します。

講師略歴：中国の牧師の家に生まれる。独学で日本語を習得。同志社大学大学院神学研究科博士前期課程修了。四谷新生教会牧師・四谷新生幼稚園園長、富坂キリスト教センター主事を経て、現在、東京府中教会牧師、日本クリスチャン・アカデミー関東活動センター所長。日本基督教団初の中国大陸出身の牧師。

薛氏が監修した『原典現代中国キリスト教資料集』（新教出版社）は、現代中国のキリスト教の現状と政教関係を知る貴重な資料。

チャペル礼拝（チャペルアワー）について

これまでのチャペルアワーの内容が、本学ホームページに掲載されておりますのでぜひご覧下さい。



中部学院大学・中部学院大学短期大学部ホームページ

URL: <http://www.chubu-gu.ac.jp/>

左側のメニューから

「中部学院について」 「キリスト教教育について」 「チャペルアワー」

とお進み下さい。 (<http://www.chubu-gu.ac.jp/about/christianity/chapelhour/>)